

悪性黒色腫以外の 皮膚がん (有棘細胞がん・基底細胞がん・ 外陰部パジェット病)

皮膚がんシリーズの最終回は、悪性黒色腫以外の皮膚がんについて説明します。
がん研究会 有明病院の先生方にリレー形式でご執筆いただいています。

1 悪性黒色腫以外の 皮膚がんは どんな病気？

皮膚がんは増加傾向にあり、発症誘因として紫外線が挙げられ、長期の紫外線暴露を受ける高齢者に多い傾向にあります。皮膚がんといっても1つの種類ではなく、皮膚にあるどの細胞ががん化するかで様々なタイプに分かれます。その中で代表的なものが悪性黒色腫になりますが、これ以外に有棘細胞がん、基底細胞がん、外陰部パジェット病などがあります。

本邦の皮膚がんが一番多いのが基

底細胞がん、次いで有棘細胞がん、日光角化症(有棘細胞がんの早期病変)になります(図1)。それぞれの疾患は発生頻度が10万人当たり6人以下であることから希少がんになりますが、皮膚がん自体が増加傾向にあり海外では乳がんや前立腺がんに次いで多いがん腫です。それぞれのがん腫で症状や治療方針が異なり、以下の項目で疾患の特徴、治療内容について説明をしていきます。

有棘細胞がん

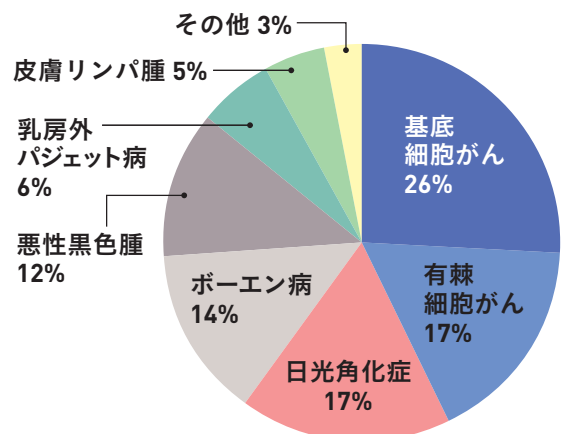
有棘細胞がんの発症誘因は紫外線になりますが、やけど、放射線をあてた、膿皮症(化膿をしている)など

慢性的に刺激を受けた場所にもできることがあります。以前は凹痕裏でのやけどで生じた有棘細胞がんが多かったですが、生活スタイルの変化に伴い減少傾向にあります。

有棘細胞がんの早期病変としてボーエン病、日光角化症があります。ボーエン病は高齢者の非露光部、特にからだに生じるため、発症誘因としてヒ素の過剰摂取が知られていますが、生活環境の改善により減少しています。肉眼的に赤く湿疹を思いますが、一部に角化や鱗屑が見られます(図2)。

日光角化症は露光部、特に顔面に好発します(図3)。長期にわたり紫

図1 本邦における皮膚がんの割合



外線にあたる高齢者に生じやすく、頬部、次いで額と耳介部に多いとされています。肉眼的所見は境界不明瞭な鱗屑を伴う紅斑局面として生じ、この状態から大きくなって潰瘍になつてくると有棘細胞がんになります。

有棘細胞がんの治療は画像検査で臓器転移がなければ切除、切除不能例や臓器転移例は抗がん剤や放射線照射を組み合わせた治療になります。

ボーエン病は切除が基本ですが、日光角化症は手術、凍結療法、イミキモド外用で治療を行います。

基底細胞がん

基底細胞がんは高齢者に生じ、紫外線が発症誘因とされています。70%以上が顔面に発生し、特に鼻に生じます。本邦では皮膚がんのなかで発生頻度が一番多く、臓器転移は稀ですが、局所破壊性が強い傾向にあります。

肉眼的所見は蠟様の光沢がある結節で、増大すると中央部が陥凹し潰

瘍になってきます(図4)。

治療は外科的切除が基本となりますが、局所再発のリスクがあるためしっかりと切除することが重要となります。

外陰部パジェット病

外陰部パジェット病は原発性と二次性に分けられ、前者は汗腺がんと考えられており陰部に生じ、後者は肛門管がん、泌尿器ならびに婦人科系のがんが皮膚に進展し肛門周囲に生じます。

臨床所見は一見すると湿疹を思わせることが多く、一部色が白く抜けるような感じになります(図5)。長年、湿疹やカンジダ症として治療を受けることが多いため、ステロイド

2 トピックス

外用をしても改善しない場合は外陰部パジェット病の可能性があります。治療は境界が不明瞭であるため術前に切除範囲を確認したうえで外科的切除ならびに再建術を行います。

今回取り上げた、有棘細胞がん、

基底細胞がん、外陰部パジェット病の進行期治療は従来からの抗がん剤が中心で、外陰部パジェット病では保険承認された薬剤が一つもありませんでした。先般、これら上皮系皮膚悪性腫瘍に対し免疫チェックポイント阻害薬であるニボルマブが保険承認され、新たな時代へと突入しました。

3 最後に

3回にわたり皮膚がんについて解説をしてきましたが、皮膚がん検診がないため医療機関を受診するタイミングは自己判断になります。自覚症状を伴うことが少なく、以前からあったから大丈夫、湿疹だと思っていた等で受診する機会を逃してしまうこともあります。

気になる黒子がある、湿疹が治らない、変なあざがあるなどの症状があれば、ためらわずに医療機関を受診してください。



よしの こうじ
吉野 公二先生

がん研究会 有明病院
皮膚腫瘍科 部長

1998年日本大学医学部卒業。国立がん研究センター中央病院、がん感染症センター都立駒込病院医長・部長を経て、2022年4月より現職。皮膚がん全般の内科ならびに外科治療に従事している。

図2 足に生じたボーエン病



図3 頬部に生じた日光角化症



図4 頬部に生じた基底細胞がん



図5 陰部に生じた外陰部パジェット病



*長らく連載を続けてまいりました「誌上セミナー」

部位別がん研究室」は今回で最終回となります。ご愛読ありがとうございました。